

新刊紹介

荒川 紘著

『東と西の宇宙観』 西洋篇・東洋篇 (紀伊国屋書店、2005年発行、2940円)

———堀川 哲

夜空を見ると星が輝いている。しかし星と星との間は漆黒の闇である。星には大きいものもあれば小さいものもある。輝きにも違いがあるようだ。そして星々の空間上での位置は移動しているようである。人間は昔から空を見上げてきた。夜空の星々を見上げてきた。サルが夜空を見て物思いにふけることはない。これは人間だけが行う行為である。なぜかは知らないけれど、私たちは時として夜空を見上げ、何かを感じるのである。

その個人的な感じが社会化され、体系化されるとそこに宇宙観が誕生する。とりわけ前近代の社会においては、宇宙観は同時に社会論であった。宇宙とは何であるかという問いは同時にこの社会とは何であるかという問いであった。王が神の代理であり、宇宙が神の表現であるとすれば、王の行為は星々の運動に従ったものでなければならない。星々の運動を読解し、その意味を解釈することが王国にとって死活の問題となる。宇宙論は社会論なのである。

荒川紘氏の『東と西の宇宙観』は「西洋篇」「東洋篇」の2冊からなる大著である。西洋編では古代メソポタミアの宇宙論からはじまり、ユダヤ＝キリスト教、ギリシア哲学・自然学と展開し、中世スコラからデカルト的機械論へ、そしてアインシュタインまでの宇宙論が概観される。「東洋篇」で扱われるのは、古代インド・バラモン教、ヒンドゥー教、仏教、儒教や道教、朱子学といった中国の哲学などである。こういうわけで本書は宇宙論の総合百科とでもいうべき作品となっている。西洋と東洋の宇宙観を一望のもとに通観できる本は他にはあまりない。

本書の教えるように、宇宙観はまず神話的思

考として出発する。星々は神々であった。神話的思考はいったんは古代ギリシア、特に小アジアのギリシア系自然学者によって断ち切られる。イオニア自然学、タレスやアナクシマンダロスのそれは「神々なき宇宙論」であった。しかしこうした宇宙論はやがてキリスト教の支配と共に消え去り、宗教的宇宙観が再び世界を支配する。そして周知のように、近代になるとガリレオ、デカルトそしてニュートンの機械論的宇宙観が登場し、この流れは現代の宇宙論にまで通底する。

本書は「宇宙論」ではなく「宇宙観」の歴史である。宇宙論は科学史であるが、宇宙観は宇宙に対する人間の観念の歴史である。科学史的宇宙論では何が正しいか、が問題とされるが、宇宙観では物理学的な真偽は問題ではない。人間が宇宙をどのようなものとして観念しているか、それが人間の生き方にどう関わっているか、この思想史的な文脈が主要な関心事となる。

本書が教えているが、神話的思考は荒唐無稽な発想というわけではないのである。現代の宇宙観は科学的という装いを持っているが、しかし一皮むけば、本質的な問題は依然として未決なのである。典型的な問題は「宇宙の始まり」についての思考である。宇宙に始まりがあるとすれば、つまり宇宙は因果系列で発生したと考えれば（そう考えないことは人間には難しい）、我々は必然的に答えることのできない事柄に出会うことになる。最初の原因を生んだ原因は何か、と尋ねていけば、可能な回答は（アリストテレス的）「不動の動者」の想定であるか、あるいは「無が有を生んだ」という発想しかない。共に不合理とみえる思想であるが、しかしこれ

以外のものを思いつくことはきわめて難しい。現代風の「ビッグバン」仮説も問題を解決しているわけでは全くない。ビッグバンの以前には何があったのか、と問えば、問題が単純でないことはすぐに分かる。これは古代人が直面した問題と同じ問題なのである。

我々人間がこの問題を解けるのかどうか、まずそれが問題である。現代の宇宙論はある意味ではこういう問いから逃げることによって成立しているのである。しかし本書を読めば人類の発想はこの数千年の間、基本的には大差ないということがよく分かるはずである。

フランス・ドルヌ+小林康夫著

『日本語の森を歩いて：フランス語から見た日本語学』（講談社現代新書、2005年発行、756円）

●————— 工藤 孝史

インターネットの普及、交通手段の拡大と利便性の向上、国際的な交流関係の発達など、現代社会は国境を越えた情報交換を日常的なものにしつつある。どんな手段であるにせよ「国境を越え」ようとする時、人は言葉のちがいの問題に直面する。

古代ギリシャの人々は自分たちの話す言葉以外の「ことば」を使う人々を全て「野蛮人：barbarian」と呼んでいた。中世ヨーロッパの学者たちはラテン語を使っていれば国境を意識せずに済んだ。現代では、英語がある意味で「コイナーギリシャ語」や「ラテン語」のような“世界共通言語”的な役割をもつようになったように見える。海外旅行をしようとする人たちの間で「あっちでは英語が通じるの？」なんていう会話を良く耳にする。世界のどこへ行こうが英語さえ知っていれば大丈夫ということだろうか。

「ことば」の国境が、まるで万里の長城のように人々の生活の「内」と「外」を隔てていた時代には、きっと「ことば」は文化や生活様式と切っても切り離せない堅牢な砦であったろう。「国際社会の仲間入り」などという、実質はアメリカ中心主義の代名詞のような言葉が平気で使われるようになった今日の社会は、その意味で「ことば」の堅牢さや頑固さを忘れかけているのかもしれない。

そんななか『日本語の森を歩いて』を読んで思った。「海外旅行」「国際社会の仲間入り」そ

して「国際交流」というスローガン、そんな表面的な現象とは全く別の次元に「ことば」の“国境越え”があるのだと。この次元を切り開くキーワードは、ランゲージュ：langage という F・ソシュールの用語である。

著者は、アントワーヌ・キュリオリを師とするフランスの言語学者フランス・ドルヌと表象文化論の小林康夫。序文で「この言語学は、日本語やフランス語や中国語といったそれぞれの個別な言葉 langue がどれほど異なっていようと、そこで行われている関係操作そのものは個別な言葉によらない一般化可能なものであると考えるのです。つまり人間の言語能力 langage 一般のあり方を解明したいと考えるのです」と語るように、著者たちは「発話操作理論の言語学」の立場から日本語を分析している。

人間に共通する言語理解の地平を明らかにしようという試みは、「理性：raison」という名のもとに、既にデカルトやライプニッツといった近代の哲学者たちによって追求されてきた。この問題が「テキスト」の次元を離れて、いわゆる「発話」における概念操作ないしは「関係操作」の問題（スピーチ・アクト）として本格的に扱われるようになったのは20世紀に入ってからのことである。人間であるなら、たとえ違う「ことば」を使っていようと、発話過程では同じような概念操作または（主体と世界との）関係操作を経験しているのではないか？ そし